

折々の事件

突然の転校
これ・伝言
犬の墓

恐ろしい春
まれな機会

佐野洋

時間を消す
似た境遇
使用法の問題
残りの数

事件

突然の転校
こわい伝言
犬の墓

恐ろしい春
まれな機会



折々の事件

定価はカバーに
表示してあります

著 者 佐野 洋 企画編集・佐野企画

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二二二 一〇二二

出版部 〇三・五三九五・二五〇五

電話 販売部 〇三・五三九五・二六二二

製作部 〇三・五三九五・二六一五

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社上島製本所

初版発行 一九九三年四月九日



© Yo Sano 1993. Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第

二出版部宛にお願いいたします。

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、

禁じられています。

目次

突然の転校	5
こわい伝言	33
犬の墓	57
恐ろしい春	89
まれな機会	117
時間を消す	141
似た境遇	163
使用法の問題	183
残りの数	209

装帧 守谷義明 十六月舎
写真 普後 均

折々の事件

小説現代には、大岡信の『折々のうた』に想を得た短編のシリーズ『折々の殺人』『折々の犯罪』を書いて来た。今回はその三ラウンド目である。『事件』と名付けたことで、題材の範囲は、前の二つより広がることと思う。

突然の転校

小学も五年となれば出で稼かせぎ

居所不明とて学校に来ず

筏井嘉一いかりかいじち

『荒あらたえ栲』(昭一五)所収。明治三十二年富山県生まれ、昭和四十六年没の歌人。東京下町の小学校で多年音楽教師だった。短歌は最初北原白秋に師事したが、昭和初年代には新興歌人連盟に参加。都会生活の哀歎を鋭く見つめて写實的に詠む。下町の教師の日常に容赦なく関わってくる貧しい庶民生活をしばしば歌う。「欠食児の父戦死すと報到れり一年生にて事わきまへず」のような歌もある。

(大岡 信『第三折々のうた』・春のうた)

一時期、いわゆる「サラ金」の取立てから逃れるために、家族揃そろって行方をくりますという事態が、あっちこっちで起こった。

こどもたちは、当然学校を休むわけで、現代版『居所不明とて学校に来ず』と言えるだろう。

そんな場合、取立て側が搜索の手がかりにしたのが、こどもの転校手続きだった。

住民台帳はそのままにして逃げることもできるが、こどもの学校だけはいい加減にすますわけに行かない。そこで、学校や教委に頼んで特別の転校手続きをしても

らうのだが、その線から、転出先が洩れてしまう。

そこで、文部省は都道府県教委を通じて、「生徒、児童の転校先についての問い合わせには、慎重に対処するように」という通達を出した——こんな新聞記事を読んだ記憶がある。

『持ち上がり』という言葉がある。今度の私の場合が、まさにその持ち上がりであった。昨年度、私は二年三組の担任だったが、そのクラスが進級するに連れて、私もそのまま三年三組を担任することになったのである。

始業式の前日、学年主任の隅野から渡された三年三組の学級名簿を開いた私は、

「あらっ……」

と、思わず驚きの声を上げた。

名簿には、最初の方に男子、続いて女子の名前が五十音順に並んでいる。男子と女子とをこのように分けるのはおかしい、一緒にして五十音順にすればいいではないか、という議論もあるらしいが、私の小学校では、従来通りに男女別の配列になっている。

その女子の中ほどの方、瀬川香奈恵の欄に赤い線が二本引かれているのだ。つまり、瀬川香奈恵は私のクラスから、いなくなったということである。

私は名簿を持って立ち上がると、大股で隅野の席に行き、

「先生」と呼びかけた。「この線は、どうい、うことなんですか？」

「え？ ああ……」

隅野は顎を撫でた。彼はまだ三十代の後半だったが、ときどき、こんな老人くさいしぐさをす

る。二年前、つまり私がこの学校に赴任する前、夏休みが終わったところから、こんな妙な癖が、彼にとりついたという話であった。

「そうですね……、ええと……」

隅野は、教員室の中を見回してから、椅子を引いた。「説明しますから、ちよつと来て下さい」

そして立ち上がると、そのまま教員室の出口に向かった。大学を出て三年目、新米の私としては、従わざるを得なかった。

隅野が私を連れて行ったのは、校長室の隣りの応接室であった。

本来、ここは校長が来客と会う部屋なのだが、隅野は予め許可を得ていたのだろうか。いや、この日、校長が会議で出張中だから、無断で使う気になったのかもしれない。

「実はですね」

隅野は、そう言いながら、私にソファに座れという手つきをした。

私は、一瞬躊躇してから、浅く腰を下ろした。この日、私は膝までのタイトスカートを着けていたから、ソファに深く掛けると具合が悪いのだ。

「先生のクラスは、その生徒は転校したのですよ」

「転校ですか？　でも、そんな話、全然聞いていませんでしたが……」

「いや、おとといだか、母親がやって来て、校長に話したのです。それで、校長がぼくを呼んで……」

「でも……」

私は納得できなかった。「この瀬川香奈恵のお父さんは、ご自分で経営コンサルタントの事務

所を持つてゐる方なんですよ。転勤というはずはないし……」

「いや、それがですね……。どこの家庭にもそれぞれ事情があるわけで……。それはわかるでしょう？」

隅野は、首をかしげるようにして、私の顔を覗きこんだ。

「ええ……。それで、どこに転校したんですか？」

「ここに来てもらったのは、その点なんだ。知らないということにして置いてくれませんか」

「はあ……。だけど、あしたクラスの子と会ったとき、どう言ったらいいのですか？」

「いや、香奈恵ちゃんは、おうちの都合で学校を替わりましたとも言えは……」

「こどもたちは、それだけでは満足しないと思います。どこの学校へ行ったのか、と聞く者もあるでしょうし……」

「それはしかし……。先生が何とかごまかして下さい。いや、ごまかすと言つては語弊があるが、大人の世界のことを、そのままこどもたちに知らせなければならぬというものでもないから……。そうそう、ぼくにも、これに似た経験があるんです。三、四年前だったかな。担任していた児童の父親が、交通事故を起こし、交通刑務所に入ったんです。母親としては、近所の目が気になる、こどもを連れて引越してしまつた。こういう場合、転校の理由を、ほかのこどもに伝える必要はないでしょう？　ぼくは、『お家の都合で学校が替わつた』としか、説明しませんでしたよ」

「わかりました。でも、そのときの隅野先生は、転校のちゃんとした理由をご存じだったのでしよう？　ところが、今度の場合は、突然に転校だと言われ、しかもその事情も教えていただけない。あたくしは担任として失格だとおっしゃるのですか？」

言いながら、私は目頭^{めがしら}が熱くなった。論理的に話しているつもりだったが、自分の言葉に興奮させられてしまったようだ……。

「ううん……」

隅野は私の口調に当惑^{どうわく}したのか、目をぱちくりとした。私がそこまでむきになるとは思わなかったのかもしれない。「実は、瀬川香奈恵の父親のことなのだけれど、秋原^{あきはら}先生はよく知っているの？」

「よくというほどではありませんが、去年の春だったかの参観日に、お会いしました」

「で、どうだった？ 怖^{こお}そうな人だった？」

と、隅野は声をひそめて聞いた。

「いいえ、別に……。立派な紳士という感じでしたよ」

香奈恵の父瀬川吾郎^{ごろう}は、学籍簿の資料によると、四十五歳であった。小学校二年の一人娘がいる割りには、年を取っているが、それは結婚が遅かったためかもしれない。

「それがですね。奥さんの話だと、怖い人なのだそうです」

隅野の声は、相変らず小さかった。

「怖いって、どういう意味ですか？」

「酒癖^{しゅく}が悪く、酔っ払うと奥さんやこどもを怒鳴^{どな}り散らす。ときには暴力も振るう」

「まさか……」

と、私は首を振った。隅野には言っていないが、私が瀬川吾郎と会ったのは、参観日の一度だ

けではない。学校以外の場所で偶然に^あ会い、一緒に酒を飲んだりもしたのだが、彼の酒癖は、決して悪くなかった。その点については、証人もいる……。

「いや、そうらしいよ。香奈恵という女の子は、なぐられて腕が骨折したこともあったとか……」

「そうですか……。香奈恵ちゃんが、学校にギプスをはめて来たことは、確かにありますが、自転車に乗っていて転んだと言っていました」

「いや、それですよ。父親になぐられたとは言いにくいので、自転車ということにしたんでしょ
う」

「はあ……。でも、それと転校とは、どういう関係があるんですか？」

と、私は聞いた。

「いや、それでですね」

隅野は、わざとらしく眉をひそめた。「そうい、うご主人に耐えられなくて、奥さんは香奈恵ちゃんという子連れて家を出た。しかし、こどもを学校にやらないわけにはいけないから、転校させたというわけです。新学年で、転校には一番いい時期だったし……」

「それで、香奈恵ちゃんの転校先は都内なんですか？」

私には、それが気がかりであった。

正直なところ、私は、瀬川香奈恵が好きだった。少しおしゃまな感じもあるが、頭もいいし、動作も活発^{どうき}だった。何よりも好ましかったのは、授業中の態度である。それが特徴の大きな目を見開いて、私の言葉に一々うなづく……。これまでの私の人生に、こんな素直に私の言うことを聞いてくれる者はいなかった。教師という職についたことを感謝したい気持ちにさえた……。

だから、転校したあとの香奈恵のことが気になったのだ。都内の学校ならいいが、地方の学校で、言葉が違うなどといじめられたりしたら、かわいそうだ……。

「いや、秋原先生はそれを知らない方がいいと思うんだ。校長も同じ意見で……」

「どうしてですか？」

「そんなに怖い顔をしないで下さいよ」

と、隅野は笑った。

「だって……。校長先生や隅野先生がご存じなのに、担任のあたくしに教えて下さらないというのは、筋が通りません」

その点だけは、絶対に譲れない……。私は必要以上に、力んでいた。

「奥さんの話だと、香奈恵ちゃんの父親というのは、暴力団などにも知り合いがいるんだそう
だ」
「嘘……」

と、私は叫んだ。「そんな風には見えなかったわ」

「いや、暴力団でも、偉くなるほど、普通の人には紳士的な態度を取るものらしい。それに、父親という人自身は、暴力団ではなく、その親分と知り合いなんだろう」

「そうなんですか……。でも……」

「それですね。奥さんと娘が姿を隠したとなると、必死になって探すに違いない。とくに、娘だけでも自分の手元に置いておきたいというので、あらゆる手段を尽すに違いないというんですよ。あらゆる手段の中には、暴力団に頼むことも含まれる」

「……………」

私は黙ってうなずいた。私の知っている瀬川吾郎は、確かに子煩悩こげんがうであつた。そんな事態に当面したら、香奈恵を探すのに、手段を選ばないかもしれない。そのところは納得できた。

「それでですね」

と、隅野は小さい声で続けた。「こういう場合に、暴力団が手がかりにするのは、こどもの転校先なんだそうです。サラ金苦で夜逃げした人たちを探す際にも、真先に彼らが目をつけたのは学校だつた……。しかも、瀬川香奈恵の場合は、担任教師が女性だとすれば、彼らが、秋原先生に狙いをつけることは、十分に考えられる。彼らが接触して来たとき、先生は最後まで何も知らないで通した方がいと思ふんです」

「ええ、その点はわかりますが、それは要するに、あたくしが知つていても知らないと言えはいわけでしょう？　そうじゃないかしら」

「いや、校長が言うには、先生がなまじ知つていると、つい表情に出てしまう。相手がそれを見抜いた場合、先生に対して、どんな態度を取るか……。しかし、実際に知識がなければ、自信を持って知らないと言えるわけですから、相手につけられないで済む。そういうわけで、秋原先生には瀬川香奈恵の転校先を知らせない方がいい。そして、だれかにそれを聞かれたら、校長のところに行つてくれと言えばいい……。まあ、そういうことになつたのですよ。だから……」

「わかりました。いろいろ氣を使つて下さつて……」

と、私は言つた。釈然としない氣持は残つたが、これ以上粘つても、隅野の口は開かないだろうと考へたのだ。